

あっという間の10時間

司馬遼太郎さんの大ファンである。そもそものきっかけは、週刊朝日に連載されていた『街道をゆく』であった。毎週欠かさず週刊朝日を購入、真っ先に『街道をゆく』のページを開いていた。面白いのはもちろんだが、ぼくが夢中になったというか、司馬さんて凄いなと思ったのは、モノの見方、考え方を教えられたところにある。

それ以前から司馬さんの小説は読んでいた。『項羽と劉邦』『霸王の家』『果心居士の幻術』『梟の城』、いずれも面白く読んだ。しかし、小説はフィクションである。『街道をゆく』はノンフィクションである。この違いは大きい、と思う。ノンフィクションには説得力がある、というか教え諭される場所がある。

「嵯峨散歩」では都江堰の話が出てくる。紀元前、中国を統一する以前の秦が施工した治水工事である。施工者として起用された李冰は、都江堰というダムを作って岷江を分流し、成都平野を穀倉としたのだ。

「嵐山の渡月橋の下の中洲も、ひょっとすると人工(堰)かもしれませんね」といったのは、旅の仲間の森浩一教授(同志社大・考古学)であった、というくだりがあって、都江堰がぐっと身近に引き寄せられる。

成都には4度滞在、その都度都江堰を訪れていた。始皇帝より100年近く前の話した。項羽と劉邦は、始皇帝の次の時代を担う英雄たちである。

3月23日から4月2日、コスタリカへの山旅を楽しんできた。手塚治さんの漫画、『火の鳥』のモデルといわれるケツァールにも出逢えたし、チリポ山3820mにも全員登頂できた。中南米の国々は、アメリカ経由になるので遠い。成田からダラスまで約10時間、ダラスで乗り換えてコスタリカの首都サンホセまで約4時間。

海外への山旅は、時間潰しに本を携行する。できるだけ面白い本を選ぶのだが、読み始めて1時間もすると、読み厭きたり、読み疲れて、パタンと本を閉じるのが通例だ。『街道をゆく』は、そういうことがない。物語ではないからだろう、というのがぼくなり分析である。今回、成田からダラスまでの10時間対策として、『アメリカ素描』を用意した。これまでも何回か読んでいたが、一気に読み通したことはない。身動きできない10時間と素材の良さが、厭きさせず、疲れさせず、スーッと読み通させてくれた。

中学生の頃だから、50年以上も昔の話しになる。近所に可愛がってくれたお兄さんがいた。時々、焼き鳥屋さんに連れて行ってくれたりして、懐かしい思い出になっている。米軍キャンプに出入りしているらしい。彼はアメリカと言わず、ステイツと言う。意味は通じたので聞き返すことはしなかったが、なんでステイツと言うのかな、という疑問はずっと引き摺っていた。『アメリカ素描』で、その疑問は氷解した。「アメリカは法でできた国だから」。

あっという間の10時間であった。